

国際日本学研究所

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

国際日本学研究所では、多岐にわたる日本研究の諸分野を学際的・国際的なコンテキストから捉え直し、外部資金獲得から研究活動の充実、研究成果の周知、それによる社会連携・社会貢献に至るまで、各段階の取り組みが有機的につながり結実している。研究会、シンポジウム、セミナー、共催講座、貴重な資料のデータベース化と公開など、それらは国内外に向けて還元されている。

一方で財政面での課題のみならず、懸念される「海外における日本研究の衰退傾向」などの外的な環境の変化に対応すべく、研究所としては不断の検証と改善が求められるだろう。そのためにも、組織としての在り方を客観的な視座で点検・評価する第三者評価を導入し、また内部の質保証を今以上に充実させる方策が期待される。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

指摘された「懸念される「海外における日本研究の衰退傾向」などの外的な環境の変化」への対応については、新たに国際日本文化研究センターの主導の下で結成された「『国際日本研究』コンソーシアム」の資金的補助を受けて、欧州日本学研究所を中心とした在欧若手研究者の組織化と活性化に取り組むようにした。「国際日本研究」コンソーシアム側にも好評で、継続的に活動できるように努力していく。

第三者評価については、大学評価委員会の指摘でもあり、引き続き検討するが、一つには予算の問題と、また一つには事務方が江戸東京研究センターとを兼務している関係で、事務方の相当の努力にもかかわらず、当面そこまで手が回るかどうかが危惧されている。とはいえ資金面についてはクリアできている江戸東京研究センターにおいては第三者評価を導入しており、国際日本学研究所でも工夫していきたい。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

国際日本学研究所における2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況に関しては、指摘された課題の遂行が概ね実現されていると評価できる。「『国際日本研究』コンソーシアム」の資金的補助を受けた在欧若手研究者の組織化と活性化への取り組みは今後の成果が期待されるものである。懸案事項となっている第三者評価の導入に関しては、「予算の問題」と事務方の対応力という懸念が示されているが、「国際日本学研究所でも工夫していきたい」という努力の実現に注目したい。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2019年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2018年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2018年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

・「新しい「国際日本学」を目指して」と題して公開研究会等を開催

1. (1)新しい「国際日本学」を目指して1 公開研究会

2018年7月11日(水)18:40~20:40。法政大学九段校舎3階第1会議室。テーマ:「17・18世紀カンボジアから日本への友好の書簡—近藤重蔵編『外国関係書簡』より—」。報告者:北川香子(法政大学)。司会:小口雅史(法政大学)

(2)新しい「国際日本学」を目指して2 公開研究会

2018年7月26日(木)17:00~19:00。法政大学ポアソナード・タワー19階D会議室。テーマ:「中世密教僧の日本国号説と社参作法—『日本得名事』を読む」。報告者:高橋悠介(慶應義塾大学)。コメンテーター:小口雅史(法政大学)。司会:大塚紀弘(法政大学)

(3)新しい「国際日本学」を目指して3 鼎談会

2018年10月28日(日)14:30~17:30。法政大学ポアソナード・タワー25階B会議室。テーマ:「改めて問う、「国際日本学」とは何か?—国際日本学研究所の過去・現在・未来—」。鼎談者:星野勉、安孫子信、ヨーゼフ・クライナー(以

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

上法政大学)。聞き手：小口雅史（法政大学）。

(4)新しい「国際日本学」を目指して4 アルザス・若手研究者ワークショップ

2018年11月2日（金）・3日（土）。アルザス・欧州日本学研究所（フランス）。テーマ：「ヨーロッパにおける日本研究の現状と拠点形成のために―若手研究者たちに聞く」。安孫子信、小口雅史（以上法政大学）、黒田昭信（ストラスブール大学）他4名、欧州若手研究者6名。

(5)新しい「国際日本学」を目指して5 公開研究会

2018年11月7日（水）17：00～19：00。法政大学ボアソナード・タワー19階D会議室。テーマ：「米・舍利・宝珠―中世日本の密教における米粒のエンジェンシーとネットワーク」。報告者：スティーブン・トレンソン（早稲田大学）。コメンテーター：高橋悠介（慶應義塾大学）。司会：小口雅史（法政大学）

2. 「国際日本学」関係の公開研究会を開催

(1)2018年11月30日（金）18：40～20：00。法政大学ボアソナード・タワー3階0300教室マルチメディアスタジオ。江戸東京研究センター第2研究プロジェクト「江戸東京の「ユニークさ」」主催、国際日本学研究所共催。テーマ：「隅田川をさかのぼる福神の系譜―大田南畝文・鳥文斎栄之画『かくれ里の記』まで―」。報告者：ラドゥ・レカ（ハイデルベルク大学）。司会：小林ふみ子（法政大学）

(2)2019年1月15日（火）18：30～20：30。法政大学ボアソナード・タワー3階0300教室マルチメディアスタジオ。テーマ：「雪国を江戸で―都鄙合作出版物としての『北越雪譜』―」。報告者：森山武（マードック大学）。司会：小林ふみ子（法政大学）

(3)2019年2月20日（水）10：00～11：40。法政大学富士見ゲートG602教室。テーマ：「なぜ朝鮮王朝の文学は藪医者を描かなかったのか」。報告者：高永爛（全北大学校）。コメンテーター：福田安典（日本女子大学）、吉丸雄哉（三重大学）。司会：小林ふみ子（法政大学）

3. 本研究所王敏研究室主催・後援の研究会等

(1)2018年6月16日（土）。法政大学ボアソナード・タワー25階B会議室。王敏研究室主催「平和の実践」ワークショップ。

(2)2018年7月17日（火）。日比谷松本楼本店。王敏研究室主催「平和の実践」ワークショップ第2回「和平東亜のために」。

(3)2018年9月17日（月）。千代田教育グループ本部会議室。王敏研究室後援「日中翻訳フォーラム」。

(4)2018年11月7日（水）。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催「周恩来の詩〈雨中嵐山〉から隠元禅師へ」研究会。

(5)2018年12月18日（火）。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催「日中平和友好と人文交流の深化へ」ワークショップ。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

1. (1)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20180711report.html>

1. (2)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20180726report.html>

1. (3)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20181028report.html>

1. (4)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20181102report.html>

1. (5)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20181107report2.html>

2. (1)当日配付資料

2. (2)当日配付資料

2. (3)研究成果報告集『国際日本学』第17号（2019年度刊行予定）に小特集を掲載予定

3. (1)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20180616report.html>

3. (2)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20180717report.html>

3. (3)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20180917report.html>

3. (4)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20181107report1.html>

3. (5)<https://hijas.hosei.ac.jp/news/20181218report.html>

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2018年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

発表者、内容等)の詳細を箇条書きで記入。

1. 出版物等

- (1) 本研究所の紀要にあたる研究成果報告集『国際日本学』第16号を2019年3月29日に刊行。国際日本学に関する一般的な研究成果報告3本、資料紹介1本、「特集 近世日本における〈北方〉イメージについて」の報告論文5本、本研究所が公募している若手研究者研究論文採用論文1本、などを掲載した。そのうち特集論文は2017年7月23日に法政大学国際日本学研究所シンポジウム「近世日本における〈北方〉イメージ」における発表をもとに構成(第45回三菱財団研究助成研究)したもの。山東京伝、只野真葛、平尾魯僊といった立場の異なる3名の作品における絵と文章から、〈北方〉がどのように描かれているのかを比較した。論文名は下記の通り。
- ・「絵地図における〈北方〉へのまなざしー「みちのく」から「蝦夷地」 米家志乃布
 - ・「奥州の狂歌人の季節感ー規範を超えて雪を詠む」 小林ふみ子
 - ・「名所絵本『東国名勝志』と元禄地誌」 真島望
 - ・「『北方』という郷土に生きるー安部佐市『入田付昔語集』をめぐるー」 伊藤龍平
 - ・「19世紀怪談文化における〈北方〉ー京伝・真葛・魯僊の場合」 横山泰子
- (2) 小口雅史・佐藤信編『古代史料を読む』下 平安王朝篇(2018年6月、平安王朝期の日本古代の史料の最新の解釈を分析した小口雅史執筆の論文〈徳三年正月二十三日付「前陸奥守源頼俊款状」、空海著『性霊集』他多数を含む))
- (3) 『法政史学』90(2018年9月、マルティン・ルター「宗教改革」五〇〇年を紹介する小口雅史論文を含む)
- (4) 『法政史学』91(2019年3月、ドイツ・ブレーメン海外博物館所蔵の板碑の紹介をした小口雅史論文を含む)
- (5) 王振芬・榮新江主編、旅順博物館・北京大学中国古代史研究中心編『絲綢之路与新疆出土文献ー旅順博物館百年紀年国際学術検討会論文集』(2019年3月、吐魯番出土仏教資料群調査と群外綴合を紹介した小口雅史論文を含む)
- (6) 『へんちくりん江戸挿絵本』(2019年2月、小林ふみ子著)
- (7) 長島弘明編『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』(2019年5月、小林ふみ子「たから合の記・狂文宝合記」「小野[バカムラ]【竹冠+愚】諷字尽」「しみのすみか物語」「風来六部集」の4項目を担当)
- (8) 『京都語文』第26号(2018年11月、小林ふみ子「書籍を模擬する遊びー「見立絵本」にかんする疑問、から」を掲載)
- (9) 横山泰子・門脇大・今井秀和・斎藤喬共著『江戸怪談を読む 牡丹灯籠』第一章(2018年7月、横山泰子「美しき怪談・牡丹灯籠」を掲載。中国から伝えられた原話をもとに、様々な翻案がなされてきた牡丹灯籠系怪談の特徴を考察)
- (10) 『歴史 REAL 大江戸の都市力』(2018年11月、田中優子「吉原遊郭は、都市の中のもうひとつの都市だった!」を掲載)
- (11) 『歴史 REAL 大江戸の都市力』(2018年11月、横山泰子「江戸の人びとはなぜカッパを信じたのか?」を掲載)
- (12) 『歴史 REAL 大江戸の都市力』(2018年11月、小林ふみ子「江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」を掲載)
- (13) EToS 叢書1『新・江戸東京研究 近代を相対化する都市の未来』(2019年3月、共著。安孫子信「江戸東京のモデルニテの姿ー自然・身体・文化」を掲載)
- (14) EToS 報告書1『風土(FUDO)から江戸東京へ』(2019年3月、安孫子信編著。ブランディング事業への協力の成果)
- (15) EToS 報告書2『アートと東京/文学と東京』(2019年3月、安孫子信編著。ブランディング事業への協力の成果)
- (16) 『日本華人』(2018年12月、王敏「周恩来の詩作『雨中嵐山』と日韓の禹文化について」を掲載)
- (17) 『全球華人政治家論壇 HAI WAI KAN SHI JIE』(2018年12月、王敏「从周恩来的嵐山考察说到大禹文化在日本、韩国的影响」を掲載)
- (18) 『人文化成: 中国と周辺国家の人文交流』(2018年9月、王敏「中国と日本の人文交流: 「〈大禹、東洋下り〉」の啓示」を掲載)
- (19) 『シルクロードの旅路(丝路之旅)』(2018年10月、王敏「大禹の東洋下りから海のシルクロードへ」を掲載)
- (20) 『中国鑑湖』第5巻(2018年10月、王敏「日本の大禹信仰文化に関する管見」を掲載)
- (21) 『和華』第20号<温故知新>(2019年1月、元内閣総理大臣福田康夫氏&法政大学王敏教授対談「市民レベルの日中交流をどう進めるか」を掲載)
- (22) 『銀河鉄道の夜』(2019年2月、王敏監訳・監修・解説・翻訳)
- (23) 桑山敬己・綾部真雄編『詳論 文化人類学ー基本と最新のトピックを深く学ぶ』(2018年4月、山本真鳥「第4章 文化と経済」を掲載。)
- (24) 岸上伸啓編『はじめて学ぶ文化人類学ー人物・古典・名著からの誘い』(2018年4月、山本真鳥「文化とパーソナリティーマーガレット・ミード」「経済人類学と構造主義歴史人類学ーマーシャル・サーリンズ」を担当)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

(25) 『グローバル化する互酬性－拡大するサモア社会と首長制－』(2018年10月、山本真鳥著)。

2. 学会発表等

- (1) 細井浩一「“同床異夢”か“異榻同夢”か～日本文化の資源化に関する研究と政策」へのコメントおよび総合討論参加(国際ワークショップ「人文科学と社会科学の対話－国際日本研究の立場から」、2018年7月21日、国際日本文化研究センター、小口雅史、ゲーム理論の日欧比較を中心に見解を述べた)
- (2) 総括国際シンポジウム「断片がつなぐ世界各地の吐魯番出土文書コレクション」(「諸国探検隊収集・欧亜諸国保管西域出土史料の包括的再点検による東アジア史料学の革新」研究チーム主催、2018年12月22日、法政大学、小口雅史統括)
- (3) 総括国際シンポジウム「物質文化と精神文化の交流と断絶からみた北方世界の真相」(「物質文化と精神文化の交流と断絶からみた、海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究」研究チーム主催、2018年12月26日、法政大学、小口雅史統括)
- (4) 第5回周恩来研究国際学術研究会(2018年10月27日、中国・南開大学。王敏「周恩来の嵐山考察と日本の禹王信仰－人民外交思想の形成要素について」を講演)
- (5) 国際シンポジウム「アジア・アフリカ視野における日本学国際シンポジウム」(2018年11月11日、中国・上海外国語大学。王敏「日本語という通路の彼方」を基調講演)
- (6) 第6回「治水神・禹王研究会」研究大会(治水神・禹王研究会主催、国際日本学研究所後援。2019年3月30日、法政大学。王敏「日中友好と禹王研究」を発表)
- (7) 第20回国際浮世絵学会春季大会(2018年6月10日、法政大学。小林ふみ子「文政期前後の山水名所題絵入狂歌本の出版とその改題・再印－浮世絵風景画流行の前史として－」を発表)
- (8) 国際会議「Japanese Literature and Historical Narratology」(2018年5月3日、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン アジア研究部日本センター。竹内晶子“Fusion of Narration and Characters’ Speeches in Noh: Its Socio-Religious Functions in Deity Plays”を発表)
- (9) 国際シンポジウム「日本哲学入門」(2018年11月19日、パリ・ナンテール大学。安孫子信“L’ introduction de la philosophie occidentale au Japon par Nishi Amane et la nature”を発表)
- (10) 国際ワークショップ「実証哲学と科学史」(2018年12月8日、法政大学。安孫子信“Amane Nishi et l’ histoire des sciences”を発表)
- (11) 日本文化人類学会第52回研究大会(2018年6月3日、弘前大学。山本真鳥「ヘリテージとアイデンティティー ニューゼaland在住太平洋諸島移民のアート活動」を発表)
- (12) 18th IUAES World Congress, Florianopolis (2018年7月17日、フロリアノーポリス(ブラジル)。山本真鳥“Heritage and Identity: Art activities of Pacific Islander migrants in Auckland, New Zealand”を発表)

3. その他

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 出版物本体および学会配付資料
- ・ 本学学術研究データベース

③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)

※研究所(センター)がこれまでに発行した刊行物に対して2018年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2018年度

1. 書評

- (1) 小口雅史編『律令制と日本古代国家』による日本古代史の革新的成果についての書評が『弘前大学国史研究』146(2019年3月)に掲載された(執筆者・十川陽一氏)。
- (2) 小口雅史編『律令制と日本古代国家』による日本古代史の革新的成果についての書評が『法政史学』91(2019年3月)に掲載された(執筆者・武井紀子氏)。
- (3) 小口雅史編『古代国家と北方世界』による新しい古代北方史料学研究についての書評が『法政史学』91(2019年3月)に掲載された(執筆者・小倉真紀子氏)。
- (4) 小林ふみ子の著書『へんちくりん江戸挿絵本』についての書評が日本経済新聞(2019年3月2日朝刊)、朝日新聞(2019年2月16日朝刊)などに掲載された。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・出版物等本体

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2018年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

本研究では、大規模プロジェクトである COE の終了後は、おもに予算問題から、特別な第三者評価は導入できていない。その代替措置として内部評価の充実をはかっている。ただし所員の負担を考え、評価のためだけの新しい組織を作るのではなくて、毎月の運営委員会で相互評価・批判の学術的議論が行われるように継続的作業を行っている。そこでは各事業の研究責任者からなされるさまざまな研究成果報告に対して、毎回、その検証評価の議論を、議題上も別途明記して行っている。この方式は以前の大学評価委員会からも当面の措置として認めていただいたので、この方式を引き続き充実させる方策をとっていきたいと考えている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・国際日本学研究所事務室保管の運営委員会議事録

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2018年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2017年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。

1. 2018年度中に応募した外部資金8件（全て科研費。種目：2019年度科研費）

(1) 研究代表者 6件

- ・小口雅史 基盤研究(B) (一般) 古代末期防衛の集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築
- ・安孫子信 基盤研究(C) (一般) オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究
- ・大塚紀弘 基盤研究(C) (一般) 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究
- ・山本真鳥 基盤研究(C) (一般) オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究
- ・宮本圭造 基盤研究(B) (一般) 名家道具帳のデータベースに基づく古典籍・能道具の伝来についての総合的研究
- ・鈴木裕輔 基盤研究(C) (一般) 外地発行日本語雑誌と戦時の言論の多様性：『大陸東洋経済』と石橋湛山を手がかりに

(2) 研究分担者 2件

- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践
- ・宮本圭造（研究代表者は他機関所属）

2. 2018年度中に採択を受けた外部資金（全て科研費）

(1) 研究代表者 11件

- ・基盤研究(B) 2015-04-01～2019-03-31 小口 雅史
1,590,000円 物質文化と精神文化の交流と断絶からみた、海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究
- ・基盤研究(B) 2015-04-01～2019-03-31 小口 雅史
2,120,000円 諸国探検隊収集・欧亜諸国保管西域出土史料の包括的再点検による東アジア史科学の革新
- ・基盤研究(A) 2017-04-01～2022-03-31 菱田 雅晴
1,400,000円 現代中国における腐敗パラドックスに関するシステム／制度論的アプローチ
- ・基盤研究(C) (基金) 2016-04-01～2019-03-31 安孫子 信
700,000円 西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する
- ・基盤研究(C) (基金) 2017-04-01～2021-03-31 米家 志乃布
900,000円 民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究
- ・若手研究(B) (基金) 2016-04-01～2019-03-31 大塚 紀弘
700,000円 資料調査に基づく日本中世における印刷文化の基礎的研究
- ・基盤研究(C) (基金) 2018-04-01～2021-03-31 松本 剣志郎
880,000円 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究
- ・基盤研究(C) (基金) 2015-04-01～2019-03-31 山本 真鳥
400,000円 太平洋現代芸術の人類学的研究—ニュージーランド太平洋系住民のアート活動を中心に
- ・基盤研究(B) 2016-04-01～2020-03-31 山中 玲子

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>2,140,000円 能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2015-04-01～2019-03-31 宮本 圭造 <p>1,280,000円 能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学術図書 山本 真鳥 1,000,000円 <p>(2)研究分担者 14件</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(A) 2018-04-01～2022-03-31 小口 雅史 <p>150,000円 平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2016-04-01～2020-03-31 小口 雅史 <p>1,720,500円 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2017-04-01～2021-03-31 小口 雅史 <p>260,000円 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(A) 2018-04-01～2022-03-31 菱田 雅晴 <p>400,000円 現代中国の政治エリートに関する総合研究：選抜と競争の在り方、ガバナンス能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2016-04-01～2019-03-31 小林 ふみ子 <p>400,000円 大小摺物（絵暦）の美術史及び文化史に関する総合的研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2016-04-01～2020-03-31 大塚 紀弘 <p>30,000円 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2016-04-01～2020-03-31 竹内 晶子 <p>30,000円 能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(A) 2016-04-01～2021-03-31 山中 玲子 <p>0円 伝統芸能文楽の技をヒューマンロボットインタラクション技術へ適応させるデザイン研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2015-04-01～2019-03-31 山中 玲子 <p>30,000円 能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) (一部基金) 2014-04-01～2019-03-31 山中 玲子 <p>30,000円 観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(C) (基金) 2017-04-01～2020-03-31 山中 玲子 <p>100,000円 能楽の謡の客観的な分析基盤のための新しい旋律記法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2016-04-01～2019-03-31 宮本 圭造 <p>100,000円 熊本県山鹿市の歌舞伎（式）劇場・八千代座に関する総合的史料研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) 2016-04-01～2020-03-31 宮本 圭造 <p>30,000円 能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基盤研究(B) (一部基金) 2014-04-01～2019-03-31 宮本 圭造 <p>30,000円 観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究開発センター市ヶ谷事務課作成資料および科学研究費データベース KAKEN による。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・上記した多くの研究業績は、各所員の多様な業績の中から国際日本学構築に貢献するものを中心に選んでいて、ここに氏名があげられていない他の所員等の業績をも含めると、本研究所の総合的な研究レベルは特記できると考えている。 	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・「国際日本学」は外国にも日本を対象とする研究者がいなければ成り立たないものであるが、近年の海外における日本研究の衰退傾向は改善されておらず、懸念される状況が続いている。もちろんこれは当研究所のみで解決できる問題ではないが、アルザス欧州日本学研究所での研究会を通じて、ヨーロッパにおいて日本研究の拠点や職位が減少している現状を分析し、将来の展望を 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>計画する機会を設けることが実現しつつあるので、本研究所がこの問題に多少なりとも貢献できる可能性が生じたと考えている。引き続き将来のある海外若手研究者の発掘を目指していきたい。法政大学が優先利用権を有する欧州日本学研究所で、国際日本学の将来を見据える場を継続的に提供することは国際日本学のあるべき姿としては必要なのではないか。</p> <p>一方で本研究所の研究に特徴がなければ、その存在や活動は認知されない。国際的な企業との連携や、海外の新たな研究所との連携等も追求する必要があるだろう。</p>	
---	--

【この基準の大学評価】

<p>国際日本学研究所の研究活動に関しては、質量ともに豊かな、公開研究会、鼎談会、ワークショップ、本研究所王敏研究室主催・後援の研究会などが開催されており評価できる。2018年度の研究成果は、大変充実した内容が研究所紀要や書籍所収論文として対外的に発表されており、前年比で4割以上の量的増加をみせた。学会発表も前年比で倍以上行われており、活発な研究活動が認められる。また、書評や新聞内での紹介など、社会的な評価も複数得られている。一方で、第三者評価等による外部からの組織評価は依然として得られていない。毎月の運営委員会での相互学術評価、批判の学術的議論は行われているものの、客観性・公平性・透明性が担保される第三者評価の導入も検討されるべきであろう。科研費等外部資金については、研究代表者11件、研究分担者14件の外部資金（すべて科研費）を獲得するに至っており、この面でも昨年度以上に研究活動の活発さがうかがえる。なお問題点として言及されている〈海外における日本研究の衰退傾向〉に対して、海外の若手研究者の発掘や、欧州日本学研究所という場の継続的提供などの対策を示していることは評価できる。</p>

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動							
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。							
	年度目標	これまで本研究所が研究対象として扱って地域・分野と日本との関係を新たに掘り起こし、国際日本学的手法で日本の姿をよりゆたかに描けるようにする。							
	達成指標	研究対象の増加。							
	年度末報告	<table border="1"> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> <tr> <td>自己評価</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>「新しい国際日本学をめざして」と題する公開研究会を計6回開催することができた。例えば研究対象に東南アジアを加え、また国際日本文化研究センターの支援を受けて、欧州日本学研究所にて若手の気鋭の研究者を集め、様々の可能性を検討し、今後に確実につなげることができたのは大きい。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	S	理由	「新しい国際日本学をめざして」と題する公開研究会を計6回開催することができた。例えば研究対象に東南アジアを加え、また国際日本文化研究センターの支援を受けて、欧州日本学研究所にて若手の気鋭の研究者を集め、様々の可能性を検討し、今後に確実につなげることができたのは大きい。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	S								
理由	「新しい国際日本学をめざして」と題する公開研究会を計6回開催することができた。例えば研究対象に東南アジアを加え、また国際日本文化研究センターの支援を受けて、欧州日本学研究所にて若手の気鋭の研究者を集め、様々の可能性を検討し、今後に確実につなげることができたのは大きい。								
改善策	—								
No	評価基準	社会連携・社会貢献							
2	中期目標	社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめの後は、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。 社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。							
	年度目標	本研究所自設HPの構成を再検討し、情報発信をより分かりやすい形で推進する。研究成果物の電子的公開を開始する。							
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。電子的に公開された刊行物の増加。							
	年度末報告	<table border="1"> <tr> <th colspan="2">教授会執行部による点検・評価</th> </tr> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催した。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。</td> </tr> </table>	教授会執行部による点検・評価		自己評価	A	理由	上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催した。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。	
教授会執行部による点検・評価									
自己評価	A								
理由	上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催した。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。								

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		また研究所刊行物については、法政大学学術機関リポジトリを通じて、紀要『国際日本学』14号(論文18本)・15号(論文13本)をPDFの形で全文テキスト付で公開することができた。
	改善策	—
<p>【重点目標】</p> <p>国際日本学の新しい形を模索するために、新たな対象分野の開発が必須だと考える。そのためこれまで国際日本学研究所が対象としてこなかった地域、あるいは時代、あるいは対象物を専門的に扱っている人材ないし機関を学内外、あるいは海外において発掘し、積極的に協力関係を結んでいくことを考えている。もし学内の人材であれば、研究所の兼担所員としてお迎えして、日常的に議論を積み重ねていくことを目指す。またすでに兼担所員となっている研究者においても、これまでと違った切り口で国際日本学研究に取り組んでいくことが可能であるか検討してもらうことにする。</p>		
<p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>年度末報告にも記したように、新規研究会を繰り返し開催したことによって、研究対象を大幅に拡充することができた。また国内外において人材の発掘にも成功した。例えばアルザスの欧州国際日本学研究所での若手シンポジウムでは、欧州内各地からこれまで研究所とは接点を持っていなかった人材も見出すことができ、国内でも、法政大学内外で同様に新しい人材を発掘することができ、研究所の客員所員、兼担所員としてお迎えすることができた。</p> <p>研究分野においても、田中総長が楨を中心に研究対象としていた東南アジア方面における新史料の発掘による、新しい研究視点を獲得することができたし、外国人による日本文化における穀物を研究対象とする新視点の可能性も切り開かれた。さらには長期にわたって継続している在欧日本仏教美術データベースの調査過程においても新しい人材の発掘が続けられている。引き続き、こうした分野での交流拡大に取り組んでいきたい。</p>		

【2018年度目標の達成状況に関する大学評価】

国際日本学研究所の2018年度の年度目標・重点目標は、達成指標の面から判断して十分に達成されているものと評価される。研究面で一つ懸念されるのは、「研究対象の増加」が国際日本学としての性格を曖昧にしないかという点である。研究成果として列記されているもののなかに、地域史としての北方史あるいは江戸学プロパーの成果と、一見すると判別しにくい論文が見受けられる。「国際日本学的手法」がどのような形で貫かれているのかについて論題を工夫するなどする努力が求められよう。社会連携・社会貢献に関しては、成果の電子化を通じた公開が着実に進められ、研究会への新規参加者の増大などが認められるなど、大いに評価できる。

IV 2019年度中期・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。
	年度目標	これまで研究対象として扱って地域・分野と日本との関係をさらに拡大し、国際日本学的手法で日本の姿をよりゆたかに描けるようにする。とくに海外の若手研究者との連携を深める。
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめの後には、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史料資料原本の閲覧希望に応じるようにする。 社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史料の閲覧を可能にする。
	年度目標	本研究所自設HPの構成をさらに検討しなおし、情報発信をより分かりやすい形で推進するとともに、研究成果物の電子的公開を促進する。
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。電子的に公開された刊行物の増加。データベースの搭載数の拡大。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【重点目標】

国際日本学の新しい形を模索するために、新たな対象分野の開発と海外における若手研究者の育成が必須だと考える。そのためにこれまで国際日本学研究所が対象としてこなかった地域や時代、あるいは対象物を専門的に扱っている人材を国内で確保するとともに、アルザス欧州日本学研究所を拠点に、海外での人材をさらに発掘し、新たに協力関係を深めていくことを考えている。

またすでに兼担所員となっている研究者についても、これまでと違った切り口で国際日本学研究に取り組んでいくことが可能であるか引き続き検討してもらうことにする。

【2019 年度中期・年度目標に関する大学評価】

国際日本学研究所の 2019 年度中期・年度・重点目標および達成指標はそれぞれ適切に設定されている。研究活動の年度目標としては、研究対象として扱って地域・分野と日本との関係をさらに拡大し、国際日本学的手法で日本の姿をよりゆたかに描けるようにするとある。「さらに拡大」することが散漫に陥ることなく、そこに「国際日本学的手法」が貫かれることによって、新しい国際日本学としての一貫性が示されるように留意することが重要であろう。この点は重点目標の新たな研究対象の開発という問題にも通じる。海外における若手研究者の育成という点に関しては、アルザス欧州日本学研究所を拠点とする方策が示されており、具体性に富んでいて評価できる。社会連携・貢献に関しては、本研究所の豊富な研究成果のさらなる公開と電子化や、研究会への一般参加者数増加が指標となる。年度目標「本研究所自設 HP の構成をさらに検討しなおし」についても、持続的改善がなされることが望ましい。

【大学評価総評】

国際日本学研究所においては、多様な日本研究の諸分野を、国際日本学的視角から位置づけ直し豊富な実績を積み重ねている。プロジェクト、シンポジウム、セミナー等の研究・教育活動実績は申し分なく、出版物、学会発表等の研究成果も優れている。研究成果に対する社会的評価も水準を保っており、科研費等外部資金の応募・獲得状況もめざましい。

一方、海外における日本研究の衰退傾向は懸念される材料であるが、国際的な研究所や企業との連携などを通じて、本研究所がいつもの役割を果たすことが期待される。また、第三者評価の導入に関しては、その実現のための具体的な一歩を踏み出すことが望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。